

ONさんの紀行文 たなか踏基

私の四十数年前の小説、「埋葬」「雪」を結合し全面改稿したりメイク「新雪国幻想」の執筆に際して、鈴木牧之著「北越雪譜」の現代口語訳本を再読した。塩沢生まれの鈴木牧之には、他にも著作がある。秋山郷(長野県下水内郡栄村)の紀行文「秋山紀行」「小説広大寺躍」「塩冶判官一代記」等、何れも口語訳本が今でも一般に読まれているという。鈴木牧之は、江戸時代の随想録、紀行文作家として著名である。

鈴木牧之と親交があったという、十返舎一九の弥次さん・喜多さんのお伊勢参りの戯作に、「東海道中膝栗毛」がある。当時の代表的な庶民の紀行文である。十返舎一九は、原稿料だけで生活できた日本最初の職業作家といわれている。安藤広重の「東海道五拾三次」五十五枚の浮世絵は、木版画で描いた精緻な素晴らしい旅本である。紀行文古典は幾つもある。ご存知、松尾芭蕉の「奥の細道」「野ざらし紀行(甲子吟行)」「笈の小文」「更級紀行」また然りである。他にも、「伊勢物語」「十六夜日記」「海道記」「東関日記」、外国人ものでケンペル「江戸参府旅行日記」シーボルト「江戸参府紀行」がある。

今の紀行文作者も結構いる。私の通っているスポーツ倶楽部に、平成十四年、紀行文を自費出版したONさんがいる。拙著「奇妙な喫茶店」と交換に一冊戴いた。B5版の百八十頁余りの本を読んでもたがとても感激した。ONさんは、何と定年後に五街道を一人で歩いているのである。奥付け著者略歴、昭和十年(一九三五)生まれとあるから、本人は古希になろうかという人であ

る。東証一部上場企業の元役員だった人で、今は地域の生涯学習の指導者でもある。ONさんとは現在プールで一緒に泳ぐ仲間同士である。

欧州の広場の文化に対して、日本は街道つまり道の文化といわれている。道は地域を繋ぎ、時を繋ぎ、人を繋いできた。こうした昔の街道が、近代高速交通網により寸断され、保存されずに無くなってしまふのを憂いて、道の文化を記録に止めて残したいという思いが、ONさんの動機だったようだ。もちろん、歩いたのは六十歳代の頃と思われるが、四年間掛けて五街道を一人で踏破している。踏破というと、しゃにむに歩いたという印象が強いが、決してそうではない。

ONさんの本に寄れば、昔の五街道つまり、東海道、中山道(木曾街道とも称した)、甲州道中、日光道中、奥州道中である。初代將軍の徳川家康は、慶長八年(一六〇三年)に江戸城下の区画整理と併せて、日本橋起点の五街道を幹線道路として整備し幕府直轄とした。

東海道・・・品川、大津 五十三次
中山道・・・板橋、守山 六十七次
(大津、草津を加え六十九次とする説もあり)
甲州道中・・・内藤新宿、上諏訪 四十五次
日光道中・・・千住、鉢石 二十一次
奥州道中・・・白沢、白河 十次

幕府は万治元年(一六五九年)に、道中奉行を置き、三街道を後日、道中と改名し、街道の整備、改良、関所、架橋、渡船、並木、一理塚、宿駅、助郷、人馬等の管理監督を行った。

昔は、参勤交代の公用で、大体一日平均十里(四十キロメートル)が標準だったようだ。東海道(江戸日本橋)京都三條大橋が百一十五里四百九十キロメートルで十二日間、中山道(江戸日本橋)京都草津が百

二十九里(五百七キロメートル)で十四日掛けていたようだ。ONさんの場合はそれこそ、名所、旧跡、神社、仏閣をゆっくり廻り、写真に残す気儘な旅である。一日に歩く距離は、二十キロメートル程であると記している。当時、一般旅行者の観光旅行の場合が倍の時間、一日五里(二十キロメートル)であったというから、昔同様に五街道を楽しんだようである。ネットで検索してみると、徒歩で五街道踏破の猛者は日本に未だ数名いるようだが、詳細な紀行文の点で、ONさんの右に出る人はおるまいと思う。

調べてみると現代の紀行文にも、写真でなく、自筆の絵画を添えたものがある。木曾福島画家、亀子誠著「中山道めぐり」スッチ・心(に)のこる六十九宿を描く(日貿出版)は、スケッチ百五十点を添えた紀行文である。この人は、他にも信州の山々、信濃札所等のスケッチ旅行をしている。

私は「武州・千鳥が淵異聞」、武州を舞台にした五十枚ほどの短編を一本執筆した。浦和宿、上尾宿の記述の際に、ONさんの本を一部参考にした。今後更に、大幅修正の機会あれば、ONさんの記述を、参考文献に引用させて戴こうと思っている。私がこの手の紀行文を書くとしたら、ストーリー性を加味して、長編小説に仕立て直したいと思う。ONさんと協同執筆という方法もあるのではないかと。正に、そんな楽しい遠大な夢を私に描かせてくれたのが、ONさんの貴重な体験が一杯詰る自費出版の紀行文である。

こうした紀行文や随想録は、現代においても沢山執筆されている。旅に人生を重ね合わせて懐古する気持ちは、今も昔も変わらないのである。本来街道の文化とは、近代交通手段に頼らないで、徒歩により発展する文化なのではあるまいか。